

令和 5 年 5 月 9 日現在

機関番号：34418

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2017～2022

課題番号：17K02831

研究課題名(和文) 英語文学テキストの談話的主題化の一般原則

研究課題名(英文) General principles of discursive thematisation of English literary texts

研究代表者

菊池 繁夫 (Kikuchi, Shigeo)

関西外国語大学・国際文化研究所・研究員

研究者番号：70204831

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 1,200,000円

研究成果の概要(和文)：本研究は、sentenceのレベルで考え出されたinformation structureが虚構textレベルでも存在することを実証しようとするものであった。従来はsentenceレベルから始まり、sentence間のつながりの研究を通して、discourseに至るまでに研究対象が広がってきていた。しかし、虚構発話行為である文学textを、sentenceと同じ言語行為から生み出されていることから、sentenceと同じ意味構造を持つという認識はなかった。そのため、本研究ではsentence内に存在するtheme-rhemeの構造に着目し、それを虚構のtextにおいて発見しようとした。

研究成果の学術的意義や社会的意義

本研究は、言語学においてsentenceレベルで研究されていた情報構造の枠組みを、虚構の文学textにも適用することで、textレベルでもthematizationの構造が存在することを証明することを目的としていた。従来の研究は自然言語に限定されていたため、文学textへの応用は本研究が初めてである。本研究では文学text中の文脈においてtheme-rhemeの構造を発見し、作者の意図を探ることを試みた点において、本研究は言語学と文学研究の間をつなぐ研究である。

研究成果の概要(英文)：This study has attempted to show that the information structure conceived at the level of sentences also exists at the level of fictional texts. In the past, research has started at the level of sentences and, by studying the connections between sentences, has expanded to the level of discourse. However, it has not been recognised that literary texts, which are fictional speech acts, have the same semantic structure as sentences, since they are produced from the same linguistic acts as sentences. Therefore, this study focused on the theme-rheme structure that exists in sentences and tried to discover it in the fictional context (=text).

研究分野：文学語用論

キーワード：discourse theme discourse rheme thematization addresser pragmatics information structure author's implication stylistics

科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属します。

1. 研究開始当初の背景

文学 text 内に生じる sentence の意味を、自然言語の sentence の意味と同じに扱う方法が従来は取られて来ていた。つまり、虚構発話者と自然言語発話者を同じにとらえていたのである。実際には虚構言語発話者、つまり、登場人物は、作者(=addresser)の作り出した message の一部である。この点に注目し、自然言語の発話者が作り出した sentence 内にある情報構造を、虚構言語の発話者である作者の作り出した文学 text 内にも発見しようとした。

情報構造の問題はプラーク学派によって研究の端緒がつけられ、後に英国の機能文法学者の M.A.K. Halliday によっても clause(節)内での情報構造という形で研究が進められた。その clause の集合体である text(テキスト)においてもみとめられるのではないかというのが研究開始の動機である。

Oxford 大学の哲学者の J.L. Austin は、その speech act theory(発話行為理論)の中で、a declarative sentence は二つの部分に分けられるとした。performative part(遂行部分)と proposition(命題)の部分である(Austin 1962)。どのような natural narrative(自然ナラティブ)でも narrator(語り手)は speaker(話し手)であり、narratee(語りの受け手)は listener(聞き手)である。例えばアメリカの社会言語学者の William Labov の集めた narrative の構造は、この形を取る(Labov 2001)。彼から一つの例を取ると“The steering wheel hit this fellow in the heart”(ハンドルがそいつの胸に当たった)という narration(語り)は普通の会話と同じく二人の会話参加者の間で行われる。この形が自然であるため、literary text(文学テキスト)を読むものは、この natural narrative と同一の narration の構造を持っていると錯覚をしてしまう。そして、虚構 text で語られている内容を事実であると錯覚する、あるいは錯覚と分かりつつ、その話を楽しむ。Natural narrative では narrative の author(作者)と narrator(語り手)は同一である。しかし literary narrative では、この二つは理論的には別物である。Narrator と narratee の世界—そこに登場人物が置かれるのだが—の背後に author(作者)と reader(読者)が置かれる世界が存在する。Reader は虚構の存在である narrator によって語られた世界を自然の世界のものと錯覚をする。(ここに literary text を読む楽しみは存在するのだが)この語られた虚構世界が Austin のいう propositional part に相当する。そして、もしこの虚構世界が proposition(命題)を持つ clause(節)と同じ構造を持っているのとするれば、clause の分析方法は虚構 text の分析に生かすことができると考えた。その中でも特に theme(主題)と rheme(題述)に焦点を当てて見てはどうかと思い至った。

2. 研究の目的

本研究は、言語学の sentence のレベルで考え出された information structure を虚構発話行為である文学 text に当てはめ、sentence と同様に虚構 text レベルでも thematization の枠組みが存在することを実証しようとするものであった。言語学においては従来は sentence までを研究対象とし、さらには後に sentence 間のつながりを研究する分析に加えて、一気に自然言語としての発話状況を研究する談話分析にまで研究対象が広がってきている。ただし、その研究対象はあくまでも自然言語についてのものであったため、その方法論を虚構発話行為である文学 text にそのまま用いることは無理があった。そのため、本研究では sentence を取り巻く虚構の文脈(=text)に sentence と同じ theme-rheme の構造を発見しようとし、そこに文学 text 中に生じる作者による含意を探ろうとした。

3. 研究の方法

上記の目的のため、例えば同一作家による作品のいくつかを横断的に分析し、そこに共通の情報構造を求めた。実際にはある種の theme の提出が topic(問題点)として行われた後、それに対する comment がその text の rheme(解決)として提出されているかを見た。それらの作品に共通の theme-rheme 構造が認められれば、それがその作者に特異的に存在する情報構造ということになる。次に、異なる作者による作品群を横断的に見ることで、同様の theme-rheme 構造が発見されれば、虚構の文学 text そのものに、この情報王増が普遍的に存在するということになる。

James Joyce の Ulysses を例にとって方法論を説明する。まず、同一 author(同一作者、つまり同一発信者)による、複数の虚構 text を横断的に見ることにより、その text の情報構造の仮説を立てる。James Joyce の Ulysses においては Dedalus と Bloom という二人の主人公が、いわば最初期の作品集 Dubliners(『ダブリン市民』)の‘The Sisters’で扱われた「二本のキャンドル」と相似の役割を果たしているという点を分析の出発点とした。Dubliners での‘The Sisters’でも、人が亡くなると二本のキャンドルが、その頭のところに置かれるとある。‘The Sisters’ではこの「二本

のキャンドル」の主題は反復して現れ、物語の後半においては、亡くなった牧師の側にあたかもキャンドルのように、その牧師の姉妹が佇んでいる。この物語が Joyce の最初の作品 *Dubliners* の冒頭に、あたかもキャンドルのごとく置かれているのは Joyce の各作品の持つグランドデザインとみなすことができるのではないかという仮説を立てて、次に大作の *Ulysses* にも同様の構造が認められるかを分析するという方法を取った。

4 . 研究成果

Chaucer の *Troilus and Criseyde* の分析では、彼の *The Canterbury Tales* のいくつかの短い tales とこの *Troilus and Criseyde* の間に共通の情報構造が見られ、それは「人の行為（全もしくは悪）」（私の言う discourse theme 談話的主題, topic)は必ずその報い(discourse rheme, comment)を受けるといものである。Shakespeare の *Hamlet* では、「虚構を信じる者」(discourse theme, topic)は最後には「だまされる」(discourse rheme, comment)という形が、その作品の情報構造で、この点は *Othello* においても同じであった。大きな作品として次に James Joyce の *Ulysses* (『ユリシーズ』)を見てみる。そこでは二人の主要な登場人物が物理的に別の場所で離れて登場し（discourse theme 談話的主題）徐々に接近しながら最終的に並び立つ（discourse rheme）ことで、この *Ulysses* は、初期の作品 *The Dubliners* (『ダブリン市民』)の ‘The Sisters’に現れたものと同じ作者の意図、すなわち dying Dublin (死にゆくダブリン)への弔意を示し、ひいてはその新生を願ったという意図が発見できる。この *The Dubliners* 中で使われている clause ‘the two candles must be placed at the head of the corpse’の情報構造が相似形の形で、この clause の使われている作品である ‘The Sisters’を支配していることも見逃せない。つまり、この二本のキャンドルを語る clause がこの ‘The Sisters’の冒頭に置かれている、そしてこの作品そのものが Joyce の最初期の短編集 *The Dubliners* の冒頭に置かれ、そして、この *The Dubliners* が後に続く Joyce の作品群の出発となる。こういった傾向の流れの中で、傑作と言われる *Ulysses* の中にも同一の情報構造をを発見でき、そこから作者の意図をくみ取ることが出来るわけである。

5 . 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文](計 6 件)

Kikuchi, Shigeo (2001) “Lose heart, gain heaven: The false reciprocity of gain and loss in Chaucer’s *Troilus and Criseyde*.” *Neuphilologische Mitteilungen* CII(4). 427–434.

Kikuchi, Shigeo (2001) “Unveiling the dramatic secret of “Ghost” in *Hamlet*.” *Journal of Literary Semantics* 39(2). 103–117.

Kikuchi, Shigeo (2012) “O I just want to leave this place: Auden’s discourse of thematized self-alienation.” *Philologia* 10. 61–72.

Kikuchi, Shigeo (2013) “Poe’s name excavated: The mediating function and the transformation of discourse theme into discourse rheme.” *Language and Literature* 22(1). 3–8.

Shigeo Kikuchi (2014) “James Joyce’s Free Indirect Thought and the two Candles in *Dubliners*” 『近代英語協会創立 30 周年記念論文集』(編集委員会代表 中川憲), 英宝社, 373-384.

Kikuchi, Shigeo (2016) “The Two Walking Candles in James Joyce’s *Ulysses*.” *Journal of Literary Semantics* (Mouton de Gruyter, Germany) 45(1) 77-89.

[学会発表](計 5 件)

菊池繁夫(2013)「Reading James Joyce’s *Ulysses* Episode 2」(ジェイムズ・ジョイスの『ユリシーズ』 Episode 2 を読む) 2013.8.10, 広島英語研究会第 54 回夏季研究大会, 広島大学, 広島

Kikuchi, Shigeo (2013) “James Joyce’s Creation of Free Flowing Thoughts and His Deracinated Life across Cities (ジェイムズ・ジョイスの自由思考の創造と彼の都市横断的な根無し草的人生), 2013.12.1, Travelling Narratives: Modernity and the Spatial Imaginary, Zurich 大学, チューリッヒ (スイス)

Kikuchi, Shigeo (2014) “The Walking Two Candles in James Joyce’s *Ulysses* (ジョイスの『ユリシーズ』における歩く二つのキャンドル),” 2014.7.5, International Association for Literary Semantics (IALS), Kent 大学, キンタベリー (英国)

菊池繁夫 (2015)「作者の意図への気づきを指導する」日本英文学会第 87 回全国大会シンポジウム 「文体論に基づく英語教育再興」, 2015.5.24, 立正大学品川キャンパス (東京)

Kikuchi, Shigeo (2015) “James Joyce’s Creation of Free Flowing Thoughts across Characters’ and

Reader's Boundaries of Consciousness (ジェイムズ・ジョイスの登場人物と読者の意識を越えた自由思考),” 2015.6.11, 6th International Conference on Consciousness, Theatre, Literature and the Arts, St Francis 大学, ニューヨーク (アメリカ合衆国)

〔図書〕(計 2 件)

菊池 繁夫 他 (2013) *New Horizons in English Language Teaching: Language, Literature and Education* (Selected Papers from the Kansai Gaidai IRI Forum) 関西外国語大学出版会.

菊池 繁夫 他 (2016) 『英語文学テキストの語学的研究法』(共編著)九州大学出版会.

〔産業財産権〕

○出願状況(計 件)

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
出願年月日：
国内外の別：

取得状況(計 件)

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
出願年月日：
取得年月日：
国内外の別：

〔その他〕

ホームページ等

6. 研究組織

(1)研究代表者

菊池 繁夫 (KIKUCHI, Shigeo)
関西外国語大学・英語キャリア学部・教授
研究者番号：70204831

(2)研究分担者

()

研究者番号：

(3)連携研究者

()

研究者番号：

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計1件（うち査読付論文 1件/うち国際共著 0件/うちオープンアクセス 1件）

1. 著者名 菊池繁夫	4. 巻 15
2. 論文標題 Kathy, Keiko and Kazuo Kazuo Ishiguro Never Let Me Goの'Me'を求めて	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 『現代英語談話会論集』	6. 最初と最後の頁 1-18
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

〔学会発表〕 計0件

〔図書〕 計3件

1. 著者名 菊池繁夫（分担執筆）	4. 発行年 2019年
2. 出版社 大阪教育図書	5. 総ページ数 204
3. 書名 『英語のエッセンス』	

1. 著者名 Shigeo Kikuchi（分担執筆）	4. 発行年 2018年
2. 出版社 溪水社	5. 総ページ数 416
3. 書名 The Pleasure of English Language and Literature	

1. 著者名 菊池繁夫（分担執筆）	4. 発行年 2017年
2. 出版社 研究社	5. 総ページ数 302
3. 書名 『英語のスタイル 教えるための文体論入門』	

〔産業財産権〕

〔その他〕

菊池繁夫
<https://researchmap.jp/read0132106/>

6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
--	---------------------------	-----------------------	----

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------